研究

世界戰爭と人種問題

苫米地英俊

一

世界を舞臺の背景に歐洲の野に演ぜられた大悲劇の幕が閉ぢられたあと、殘る廢墟に草むす屍、淋しく立てられてゐる十字架のほとりを吹く秋風に人心何となく穩かなるを得なかつた空々虚々の世界に漸く生命の動きが認められ始めた。財界の復活を喜ぶ聲が聞ゐる、思想界不穩の叫びも高鳴る。平和主義、軍國主義、社會主義、國粹主義、帝國主義、機會均等主義と種々雜多の響が囂々と

して天地に充ちてゐる中に一きわ聲高にかんばしる悲痛の訴に耳を傾けるとき、南洋のとある港の酒場に椰子の森を通して無邊の青海、北極より南極へつらなる太平洋を見下しながら物語る Captain Woodward の言葉が聞きとれる。

『黑が黑く、白が白である限り、黑坊は決して白人を了解せず、白人も亦黑人を了解することがない。』

『だが、ごたくさの半は白人のぶまから來るのさ。白人がつとめて黑坊の心中を察すれば大抵のごたくさは避けられるのだ。』と、話敵の Roberts が答へる。と、

『黑坊の胸の中を察するなんて聞きたくもない。世界を養牧して行くのが白人の使命だ、之が白人に割り宛てられた大きな仕事だ。黑坊なんぞ爪の垢ほどだつて了解する暇なんぞどこにあるものかね。白人は黑坊を追ひ使ひさへすればよいのだ。そんな奴等を了解しなくつたつて構ひやしない。この一事丈けは確だ、仕方がないのだ、運命なのだ。』と、船長は平氣でやりかへす。

この船長は二個の斷定をなしてゐる。その第一は『黑坊は決して白人を了解せず、白人も亦黑坊を了解しない』と云ふことで、その第二は『白人の使用は世界を養牧するにある』と云ふにある。この二個の斷定が即ち人種問題の根底思想である。

二

現代の世相を觀ずるに二個の重大問題がある。その一は社會經濟的問題であり、その二は人種問題である。この二個の問題の解決は今後の世界を轉換せしむべき一大波紋を世界歴史の上に繪くに相違ない。而かも此の問題の解決に當つて最も重要の地位に立つ處のものは我日本帝國であらねばならぬ。元來日本の文明と、歐米の文明とが同一軌道を動いてゐるものならば、問題は比較的簡單である。後進國たる我國は先進國の文明を鵜呑にし、之を模寫してゐる丈けでも危險は尠なからう。併し實際はこの兩者は全く別箇の二條の軌道を走つてゐるものである。從つて徒らに追從せんとすればそこに脫線を生ずる恐れがある。近代科學追從は我國思想界に此の脫線混亂を招致してゐるものと見られる。加之、人種問題に關しては我國は先進國の味はざる慘苦を嘗てゐる。勞働問題の解決は資本主義、資本帝國主義の潰滅を意味し、他面四民平等の理想に達するが如き錯覺に捉はれて妄動する所謂新人もある。が、吾人には更に焦眉の急を要する大問題がある。人種問題が是である。

三

Kipling は『東は東、西は西、この雙子は決して遇ふことなからむ。』と歌ふてゐる。Russell は『自由に至る道』に於て『亞細亞、阿弗利加を縛る鐵鎖の半は勞働者に依て鍛へられた。勞働者自身が專制と刼掠との一大制度の一部分』であると述べてゐる。如實に述べられた此の言から、歐米勞働者を縛る鐵鎖が、資本主義の破壞に依てよし寸斷せられる日が來るとしても、東亞民族が世界的に解放せられたことを豫期することが果して出來得るか。況んや『急激の革命に依て事物の名稱は之を變へ得んも、人類の習慣と行動とは變ふるを得ず、古き事物は新たなる名稱にて歸り來る』(Russell: Bolshevism and the West) ものとするならば、或る一派の社會改造の企が啻に危險である許りでなく、我が國民の生きんとする努力をすら殺ぐ恐れがある。吾人の直面してゐる問題は人種問題であらねばならぬ。

四

白人の使命が果して世界を養牧するにあるが否かを暫く問題外に措くも、過去の歷史は明かに白人が世界を我が物顏に振舞ひ、人類を自己の爲めに使役し來つたことを物語つてゐる。恁うした社會が何時の頃から現出せられたか、之を一瞥する爲め吾人は十五世紀の中葉に立ち戻る必要がある。

現今世界に羈を唱へてゐる白人もその當時はみじめの狀態にあつた。その安住地域と云へば僅に中部及び西部歐羅巴に過ぎず、大陸をよそにしては小英國島嶼あるのみであつた。東には露西亞の蒙古族、中央亞細亞のステップ族の雄を振へるあり、南、ダニユーブ河より近東を廻り北部亞弗利加――ナイル河よりジブラルターに亙る一たいに亙つては虎視耽々たるイズラム族が控へてゐる。而かも夕陽を西に望めば縹渺としてはてしも知らぬ太西洋の浪が岸を洗つてゐる。斯く異人種に壓迫せられ自然に圍まれて暫くは手足を伸す餘地すらかち得られなかつた。が、こゝに世界史の舞臺を一轉回せしめ、人類浮沈の革命を突如として惹き起した二つの事實が現れ出でたのである。一四九二年コロンブスは太西洋を横斷して東亞に到る新路を發見せんとして、はしなくも一防波堤に躓いた、西印度諸島が即ち之れで、米新大陸の發見となつた。然るに一四九八年ヴアスコ・ダ・ガマが印度への新路を求めて亞弗利加の南端、希望峰を廻り印度洋を越えてカリカットに上陸した。白人が洋に向つて試みた運命は啻に彼等をして自然を征服せしめた許りでなく、彼等を異人種の重圍の内より救ひ出す事になり、世界史はこゝに地中海時代の終末を告ぐると共に白人羈業の基を開くことになつた。

この時から新しき潮流に乘つた四世紀の日月は流れ始めた。して、白人は詰め込まれた歐洲の天

地から大河の決する勢で滔々と流れ出し至る處に新なる運命を開拓し今日に及むだ。赤色印度人や水牛の彷ひ歩いた米大陸に足跡を印するや、Grenrille や Hawkins, Raleigh, Drake 等の冒險家が Westward ho！と叫んで、西へ西へと進出し、樹を切り、小屋を建て、森を開いて田畑を作り、急ちにして道路は南北を貫ぬき東西に走り、遂に東、太西洋より、西、太西洋に及び、北は北氷洋より南はメキシコに至る絶對權を確立した。

斯かる間に南亞を廻つた一隊は Fort William (Calcutta) や、Fort St. George (Madras), Surat や Bombay と諸所に根據を構へて香料や絹物、木材や棉花の貿易に腹を肥やし、東印度商會の發展はやがて印度を併呑する機運を生むだ。Clive や Hastings の英傑出づるに及んではその劍光のひらめく所、四民雌伏し草木の風に靡くが如くであつた。忽ちにして北はヒマラヤより南はコモリンの岬まで、東はラングーンより西はボンペイまで悉く白人の支配に歸した。

北半球が斯くして白人の蹂躙にまかせてゐる間に Captain Cook は名もふさはしき『決意號』、『冒險號』を率ゐて一七七二年英國のプリマス港を船出して、濠洲大陸、ニュージーランドを發見した。此の當時亞弗利加は未だ世界の謎として殘されてゐた。然るに間も無く Mungo Park, Baker, Barth, Speke, Burton, Grant, David Livingston 等の冒險家相次いで此のスフインクスの懷に入り込

み遂にその謎を解いた。して、その秘密の正體が明みに持ち出だされたときに、白人は眼も眩まん許りにその無盡藏の富に驚かされた。驚嘆した白人の知識と資本と努力とは勢込むでこゝに注入され、さしも巨大な亞弗利加大陸も白人の俎上に乘せられては一たまりもなく無慘に切り取りせられてしまつた。勢力範圍てふ新語は心なき鄙野人の耳にも聞ゐるまでになつた。

恁うした四世紀の激流に洗ひ流されもせず、不思議にもかの猛威をかる白人の毒牙に斃れなかつたものは僅に我が日本と支那とのみであつた。白人は事實上、世界養牧者の地位をかち得たのである。近代科學の奇蹟は海底電信となり、無線電信と現はれ、大ホテルを海上に浮べ、鐵道網を四方に張り、自働車を走らせ、飛行機を飛ばせ、富を作り、思想を運び、あらゆる利器を備へて有色人種を屈從せしめ、之に鐵、石炭、石油、金銀を採掘せしめ、ゴム、棉花、食料品を栽培せしめ養牧者の利を十二分に收めてゐる。今や白人萬能全盛の時代となつたのである。

五

十九世紀の末葉に及んでこの白人禍は正にその高潮に達した。歐化の波打つところは岩をも碎き山をも覆へさん概があつた。北清事件は此の時に勃發し、支那分割論は頻に高調せられた。分割の急

先鋒露國が滿洲を占領し、朝鮮に魔手を伸ばさんとするに及んで我國は祖國保全の必要から止むを得ず劒を拔いて立つた。この役に露國が敗衂したために白人禍はこゝに阻止せらるゝ結果となつた。有色人種は我國の勝利を祝し虹の如き氣をはいた。十年の歲月は夢の如くに過ぎ世界戰爭が突如として起り、その進展と共に殘虐眼を蔽はしむる慘劇を生み、基督敎文明の眞相を如實に暴露し、白日の下に吾人は之を認め得た。

この戰爭は二個の意味に於て文字通り世界戰爭であつた。その一つは世界のあらゆる人種が此の戰爭に參加したことで、その二は影響が又世界的であつたことである。我が日本が日英同盟の誼により當初より聯合國の側に立つたのを首めとして、印度からは百三十萬の戰鬪、非戰鬪員を渡歐せしめてゐる。後れ馳せに參戰した支那も十餘萬の苦力を出し戰線の背後に立たしめた。黑人種も亞弗利加、亞米利加を通算すると數十萬に達する頭數を征途に上らせてゐる。その他マダガスカル人、マーオリ人、南洋の土民等が一方に加擔し、土耳古人が他方に味方してゐる。

戰禍の及ぼせる影響も思想界より財界へ、學說より實行へと大波紋をあらゆる方面に畫き、階級鬪爭は著しく赤味を帶び、その深刻さを增して來てをる。又人種問題から見ても昔し十字軍が人類を如何なる方向に導いたかを思ふとき、序上二個の事實が未來の歷史を如何に編み出すか、今や世

界を擧げて岐路に立つてゐるのである。

六

休戰條約が成立したときに救はれた氣分にため息をつき、喪服に身を包み、ハンケチに眼を蔽ふてゐる家庭にも歡喜の叫びが洩れ聞えた夕に、世界の舞臺の眞中に立つて大聲疾呼せられた大統領ウヰルソン氏の聲は異樣の魅力を以て亞弗利加の內地、太平洋の孤島にまで響き渡つた。『民族自決』は忽ちにして各民族の標語となり、將にめざめんとしてゐる有色人種の胸には其言葉に依て紅蓮の焰が焚きつけられた。此の新なる言葉は直ちに各國語に譯された、日本語にも、支那語にも、印度語にも、土耳古語にも、亞剌比亞語にも、してあらゆる他の言葉にも。愛蘭では之れが『シン・フェイン』運動となり、遂に自治を得るに至り、ポーランドは復興せられ、チエッコ・スロヴアキア國が新設せられ、イストニア、レトヴイアその他幾多の小國の存在となつた。而かも有色人種にして『自決』を得たものは絕無である。此の一大奇怪事を目擊して世間が之を不可思議とせざるは寧ろ不思議と云ふべきである。が、之は此の點に付て比較的冷淡であり得る日本人のことで、地球上の民族を見るときに如何に有色の波が澎湃として立ちさわぎ、白波を岸に寄せんとするかに驚かざ

るを得ない。支那の排英、關稅自主問題等も皆此の背景を外にしては物語ることは出來ない。

歐洲の天地に戰塵が一度收まると幾多黑人種は各々その故鄕をさして急いだ。その歸ると共に文明の香が未だ及ばなかつた山奥の住家、その爐端に凱旋せる小英雄を迎へ、それを中心に村人が集い來る。まことゝも信ぜられぬ遠き旅路の物語、異れる風物に驚の眼を瞠り、倫敦や巴里の花やかさを語る話に夜の明けるも知らざる有樣、戰爭の興奮、塹濠の奇談、盡きぬ興味をそゝる談の末には赤露の囁きや、民族自決の呟きも自然に流れて耳に入る。恁うしたさゝやかな集、罪もなき物語の中にさへ白人に對する有色人種の不平反感が自然にかもされて行く。

彼等を戰場に立たしめんとするとき、彼等に與へられたる光明——自由と平等と自治——輝き照らされた胸の中、喜び勇むで出陣した。無事に再び鄕土を見た嬉しさ、此の上は兼ての約束の實現をと心をこがして待つこの年月、何一つ約束の滿足に實行せられないのにいらだゝざるを得ない。彼等の血稅に酬いられたものは高率の徵稅と物價の騰貴による生活難とのみである。是に於て彼等は我に自由を與へよと叫ぶ、その切なる響に理がこもる、道理があればこそそれに力があり又白人は胸をゑぐらるゝ思をせずに居られない。米國黑人の鬪士、著述家で辯論家であるW・E・B・ジユボイス氏は『黑水』と題する著に於て『虐げられたる民族』のために絕叫して、『此の恥づべき戰

爭は粗野にして恐怖すべきものではあるが、黑人や銅色人、はては黃色人が白人の世界より受くる迫害と屈辱とより脫せんがため戰はざるべからざる、して又、戰ふべき決意を有する戰爭に比しても物の數ではない』と云ふてゐる。恁うした聲が米の都にも、亞弗利加の野にも、印度の山にも、太平の水にも響き渡る。白人の心は之をきいて穩かなるを得ない。是に於て白人は云ふ、『自治を與ふるは惜まない、けれども文明の低級な民族に自治を與ふることは却て彼等の不利益である、彼等は必ず彼等民族を塗炭の苦に陷れるに違ない。』と。之に對して彼等は答へる。『譬ひ萬一を過つて塗炭の苦を嘗むるとも、それは自己の責任である、自己の責任でなしたことには諦もつく、併し、白人の過誤の爲めに今日の苦痛に止まることは忍ぶべからざることである。』と。

亞弗利加の黑人マーカス・ガーヴイ氏は『白人に向くものは黑人にもよい、自由も、平等も、民主主義も黑人を益する。之に對して吾人は辯明も妥協も要しない。英人が英國を要求し、佛人が佛國を要求し、伊太利人が伊太利を要求するが如くに、吾人黑人は亞弗利加を要求する。して、この要求を貫徹するためには流血をも敢て辭せない。』と斷言してゐる。亞弗利加人は二つの愛を歌ふてゐる、『鄕土の愛』と、『家畜の愛』とが之である。この二つの愛は彼等の心に織り込まれ、眠れば夢に之を畫き、醒むれば歌に奔しる。而かも白人禍の一度侵入するや、この二つの愛は無慘に彼等

から奪ひ去られる。失へる愛の憤怒、彼等の血は今や熱火してほとばしり、黑き面を破る堅き白齒は怒の音をきしらせてゐる。

支那、滿洲に於て門戸開放、機會均等を高調する諸國が自己の門戸を堅く閉ざして有色人の入るを許さない。その說く所を聞けばそは人種問題にはあらで、經濟問題なりと。その何故なるかを尋ぬれば、生活の標準、風俗の相違にありと答へる。風俗の相違はその原を人種の相違に發することは勿論ではあるが、生活の標準の相違は正に白人掠奪の結果である。然らば所謂經濟問題も結局人種問題たらざるを得ない。白人は『我等の文明は有色人種のものよりも高い、この高き文明を有色人種の混入によりて汚辱せらるゝは忍び難い。』と高言してゐる。然らばその高き文明は如何にして得られたるか、『自由の賜なり』、然り、然らば吾人にその自由を與へよ、吾等も亦高き文明を產まんと。此の叫は蓋し印度人一個の叫びではあるまい。

七

地球上人類の棲息し得る地積は約五千三百萬平方哩と見積られてゐる。してその九割、四千七百萬平方哩は白人の配下にあり、殘りの一割、六百萬平方哩丈けが有色人種の有である。然るに南亞

の如きは旅行者としてすらも有色人種の入國を許さない。濠洲は日本の二十倍の地域を領して住民僅かに我國の十分の一に及ばない。ニュー・ジイラントの如きは全英國の大さとほゞ等しき領土に百萬の住民を有するに過ぎない、しかして、白人濠洲主義の鐵壁は有色人種に糧を與ふる事を拒むでゐる。カナダに至つては全歐洲に比すべき廣野に僅に八百萬人、合衆國は三百萬平方哩に一億五千萬人を養ふてゐるに過ぎない。而かも是等の諸國は悉く門戸を鎖して有色人種を排斥してゐる。是に於て大多數を占むる有色人種は食を求むるに窮してゐる。白人に比して人口增殖の速なる有色人種は手をこまぬいて餓死するのを待つべきであるか。

宿命に甘んじ、養牧者の命に從ふ時代は既に去つた、こゝに局面打開の機運は無言の間に進展しつゝある。資本主義者の横暴の聲を聞くこと茲に久しいものがある。勞働者が掠奪を怒る叫も絶えず耳にしてゐる。が、國内に於ける勞資の爭は兄弟墻にせめぐ類で外敵をふせぐを得ない。英國總同盟罷業が如何に英國の國力を殺いだかを見ても吾人は大に學ぶ所がなくてはならぬ。吾人の稱する資本家は白人種である。吾人は――有色人種は――總て彼等の前に勞働者である。吾人は產業界の勞働問題の考慮するに先立ち、我が民族が如何にして生くべきかを熟慮する必要がある。歐洲戰爭の生むだ最大問題は人種問題である。『我に自由を與へよ、然らずんば死を與へよ。』とパトリッ

ク・ヘンリが合衆國獨立の爲めに叫んだ要求はやがて有色人種の叫とならう。之を與へることは白人の衰退を意味する。之を拒否することは或は流血を意せん。人種問題の解決は至難中の至難である。